

教育

反貧困学習：貧困なぜ？授業で学ぶ 大阪・西成高校の取り組み

働く若者の半数が非正規雇用になり、貧困が広がっていく。そんな社会に出ていく子どもたちが学ぶべきことは何だろう。ユニークな「反貧困学習」に取り組む大阪府立西成高校（大阪市西成区）の授業を訪ね、考えた。【小林多美子】

◇ワーキングプア、日雇い派遣…社会現象、自分に引きつけ

「ワーキングプア」「日雇い派遣」……。7月初めに開かれた1年生の授業。先生が今後取り組むテーマを黒板に書き出し、生徒たちがプリントに書き込んでいく。どれも聞いたことはあるが、実態はよく知らないようだ。

「ネットカフェ難民ってなんで増えてるんやろ？」。先生が尋ねると、生徒たちが次々と声を上げた。「不景気だから！」「トヨタショックの影響や」「安いし、くつろげるから？」

授業は各学年の総合学習として行われている。社会で起きていることを自分たちの問題ととらえてもらうため、生徒の日常や進路決定にかかわるテーマを積極的に取り上げる。「ワーキングプアからセーフティーネットを考える」と題した授業ではまず「皆さんが1人暮らしをするとして、月に最低いくらのお金が必要だと思いますか」との質問に、答えを記入。生活保護の「最低生活費」、時給800円のアルバイトでの収入、正社員になった際の収入――などと比べていく。

労働法の授業が実際に役立った生徒もいる。3年生の女子生徒（17）は昨秋、アルバイトをしていた歯科医院で「もう来なくていい」と一方的に解雇を通告された。「これっておかしい」。授業で習ったことを思い出した。

労働基準法では、雇用主が労働者を解雇するには遅くとも30日前に通告するか、1カ月分の給与を支払うと定められている。女子生徒は労働基準監督署に相談し、不当解雇であることなどを確認。勤め先に内容証明を郵送し、1カ月分の給与を勝ち取った。「ほんまに自分でできるんやって、びっくりした」

*

同校がある西成区には日本最大の日雇い労働者の街・釜ヶ崎がある。区内では全世帯の約3割が生活保護を受給している。多くの生徒たちにとって、貧困は以前から身近にあり、自身の問題でもあった。

格差の広がりを受け、同校は06年度以降、学校方針に「格差の連鎖を断つ『チカラのある学校』」を掲げている。今の高校生はバブル経済が崩壊した90年代初めに生まれ、日本の経済・社会構造の変化が親世代の働き方を脅かす中で育った。卒業後に就職する生徒は、5年前には3割ほどだったが、昨年は半数を超えた。

反貧困教育に中心的に取り組んできた肥下（ひげ）彰男教諭は「生徒たちの生活背景がより厳しくなり、自分たちの置かれた環境を社会構造の問題とつなげて考える必要があると考えた」と話す。教諭が生徒たちに願うのは「貧困を生み出す社会構造を知るだけでなく、変える主体になってほしい」ということ。非正規雇用で働くことには多くのハンディがある。では、現状を変えるためにはどうすべきか――。

3年生の男子生徒（17）の父親は5年前、勤めていた会社が倒産した。今は派遣労働者として働く。家計は苦しく「なぜうちだけ貧乏なのか」と不満だったという。でも授業で、不況や年齢の壁で働きたくても働けない人たちの現状を知った。「父には早く楽になってほしい。そのためにも5年、10年後の日本がもっとしっかりしていなければ」

*

また、授業では釜ヶ崎で暮らす日雇い労働者や野宿者についても学ぶ。日雇い労働者が高速道路や大規模開発の建設現場で働き、高度経済成長を支えてきたこと。野宿しながらもアルミ缶集めなどで働き、生計を立てていること。ある生徒は「私たちも生きていくためにバイトをしている。ホームレスの人たちと変わらない」と感想を書いた。

野宿問題の授業づくりに取り組む支援団体「野宿者ネットワーク」の生田武志さんは「貧困が拡大し、『釜ヶ崎の全国化』が進んでいる。このような授業が広がってほしい」と話す。

◇教材をまとめ出版

西成高校は授業で使用している教材や生徒の感想をまとめた「反貧困学習 格差の連鎖を断つために」(解放出版社、1890円)を出版した。教材とプリント、授業の狙いや学習上の注意点などをまとめている。学校だけでなく、貧困問題を初歩から学びたい大人にも役に立つ。問い合わせは解放出版社(電話06・6561・5273)。

毎日新聞 2009年7月17日 東京朝刊

教育 アーカイブ一覧

この秋おすすめの**通信教育講座特集**



自分のライフスタイルに合わせてマイペースで学べる通信教育だから、仕事をしながらさらなる知識を身につけたい、子育てしながら学びたい、というにピッタリ。

今すぐ資料請求できます

 **不況に負けないスキルを! 副業にも活かせる優良講座。**

企画・制作 毎日新聞社デジタルメディア局